

## 公益財団法人鉄道総合技術研究所 会長・理事長交代の

### 挨拶について

2020年6月18日

公益財団法人鉄道総合技術研究所

2020年6月12日付で公益財団法人鉄道総合技術研究所（以下、鉄道総研）の会長に就任しました向殿政男の新任挨拶および退任しました正田英介の退任挨拶、また同日、理事長に就任しました渡辺郁夫の新任挨拶および退任しました熊谷則道の退任挨拶が、講堂において幹部職員に対して行われるとともに、全職員に対しては、ビデオ配信が行われましたのでお知らせいたします。

#### 記

1. 日時 2020年6月12日（金）午後13時～
2. 場所 鉄道総研 国立研究所 講堂
3. 挨拶要旨

##### （1）会長退任挨拶（前会長 正田英介）

2007年に会長に就任して以降、公益財団法人への移行や世界鉄道研究会議WCR2019の主催など、13年間にわたり会長職を続けることになり、やっと肩の荷が下りたと感じている。この間、リーマンショックなどもあったが、JR各社の運輸収入が順調に伸び、新たに大型試験設備を導入できるまでになった。また、国際研究機関との協力も進み、海外への人材派遣も拡大した。さらに鉄道国際規格センターの活動も定着し、国際的な標準化機関としても認識されるようになった。

研究開発においては、RESEARCH 2010とRESEARCH 2020の二つの基本計計画の推進に参画でき、この間、鉄道総研は、鉄道の高速度の第1の波が去った後でも、急速に発展する情報ネットワーク技術を背景に鉄道の各種シミュレーション技術の確立や運転・電力供給制御、設備の維持など鉄道技術の発展に貢献してきたほか、この間に発生した東北地方太平洋沖地震や降雨災害への対応、新しい防災技術の展開などを通して、鉄道に関する中立的な研究機関としての地位を確立した。役員・職員の皆様のご尽力・ご活躍の賜物と深く敬意と謝意を表したい。

安心して引き継げると考えていたが、新型コロナウイルス感染症により、すっきりしない形で終わることになってしまった。ポストコロナ社会というのがどのような形になるのかは、現時点では明確ではないが、小回りの利く組織で英知を生かしてゆけば、社会の変化も十分に乗り切れるものと確信している。鉄道総研のさらなる発展と役員・職員の皆様の今後の一層のご活躍を祈念する。

##### （2）会長新任挨拶（会長 向殿政男）

鉄道総研の評議員を長く勤めてきたので、鉄道総研の活動は存じており、今後、鉄道総研の発展のために努力して行きたい。私は、技術、組織、人間等の側面から安全を統一的に研究する「安全学」を提唱するなど、安全と安心の関係等に大変興味があり、今回、鉄道の安全や鉄道の安全文化に関与できるようになったことは、深い喜びである。

鉄道総研は、わが国唯一の鉄道技術のプロフェッショナル集団であり、これまでの諸先輩の営々たるご努力で、先端的な技術の確立を通して社会からの信頼を築いてきた。私たちは、これを継続、維持、発展させていく役割がある。鉄道総研の設立趣意書に、「基礎から応用にわたる広範で、高度な技術の開発を行い、社会からの諸要請に的確に応え、もって我が国の学術、文化の発展に寄与していくものであります」とある通り、私たちは、誇りをもって

活動し、心を一つにして、社会に貢献して行く必要がある。新型コロナ禍で、社会は一変し、新しい時代を迎えつつある。どの組織も、これまでの延長線上での活動では対応できない。鉄道総研も、新しい道を切り開かねばならない。しかし、ピンチは、改革のチャンスであり、知恵の出どころである。新しい社会へ向けて頑張ろうではないか。

社会は、常に変わるが、基本理念は、変わってはならないというのが、私の信条である。変わらぬ理念・理想を大事にして、時代の変化、行く末を読み、柔軟に対応していく、いわゆる不易流行である。企業体は、三つの安全を大事にすべきである。一つは、お客様の安全、モノづくりで言えば製品安全であり、鉄道では鉄道の安全そのものである。二つ目は、従業員の安全で、安全かつ健康で幸福な生活が送れる労働安全であり、三つ目は、組織体の安全で、コンプライアンスの遵守、社会貢献であり、社会から信頼されて持続的に存続し続けるという意味の安全である。私の役割は、大所、高所から大局的な目で、かつ、これまでとは異なる視点から鉄道総研の活動を見ることを通して、ここに述べた大きな理念に向かって、役員をはじめ、職員の意見を伺いながら、一緒に協力をし、明るく、楽しく、遣り甲斐のある職場にするように努めることである。



写真 会長退任の挨拶を行う正田英介



写真 会長新任の挨拶を行う向殿政男

### (3) 理事長退任挨拶（前理事長 熊谷則道）

2013年に理事長に就任した時は、公益財団法人として三年目の時期であり、公益法人としてしっかりと成長させることを強く意識した。その具体化が、基本計画RESEARCH 2020と鉄道総研の次の30年を見据えたRESEARCH 2025の策定であり、この間、新しい研究部と研究室を創った。これらは活動範囲を広げつつ、多くの成果を出しており、殊更うれしいことである。また、鉄道総研の総意としての志を表現する「ビジョン」を設定し、「使命」「戦略」を明確にできたことは、特に心に残る。

この期間を通じて「鉄道総研のゆるぎない役割の再確認」「安全技術、高速化技術、シミュレーション等基礎研究の重視」「温故知新をベースに総合力の発揮」の取り組みを行ってきた。これらを進める活動全般の基本として「国、鉄道事業者等からの信頼の維持と高い品質成果の提供をダイナミックに進める」ことを強調した。また、リサーチマップの策定、基礎研究への再チャレンジなどにもウエイトを置いてきた。研究開発は、職員の尽力と意識の醸成により、見事に達成されていると強く感じる。

渡辺新理事長は、多角的に物事を見ることができ、コミュニケーション能力と行動力に優れている。鉄道総研の持続的発展を牽引できる人物として適任であり、その活躍に期待する。

研究者とはオリジナリティを発揮しつつポテンシャルを高めていく人材であり、課題の解決には個々のひらめきとともに、一体的に取り組むパワーも必要である。これが鉄道総研の総合力というポテンシャルである。今、私たちは想定を超える不安定で不確実な現実の中にいるが、デジタル技術という新しい鉄道を創造する革新技術を身に着けていくことは明るい要素である。鉄道事業者をはじめとする社会から「信頼」を受け続けることを心に、「知と総合力とチャレンジ精神」をもって脅威に立ち向かい、課題を乗り越えていただきたい。新会長、新理事長のもと新たな発想で、大いに力を発揮されることを期待する。

### (4) 理事長新任挨拶（理事長 渡辺郁夫）

鉄道総研の運営や研究開発に対して長年に渡りご指導いただいた正田前会長と、強力な指導力で鉄道総研を牽引してこられた熊谷前理事長に感謝申し上げます。これまでのご尽力により、鉄道総研は、研究開発等の活動を通して、鉄道事業者、国・産業界から信頼される組織としての活動ができ、プレゼンスを高めることができた。

現在、新型コロナウイルス感染症により、世界、また日本の鉄道業界は大変な状況にあるが、鉄道総研では、基本計画RESEARCH 2025のスタートの年であり、基本計画に定めた活動の基本方針「安全性の向上、特に自然災害に対する強靱化の研究開発の推進」「デジタル技術による鉄道システムの革新に資する研究開発の推進」「総合力を発揮した高い品質の成果の創出」「日本の鉄道技術の国際的プレゼンスの向上」「能力を発揮でき、働きがいを持てる職場づくり」を変えことなく活動を推進する。また、「安全性の向上」「低コスト化」「環境との調和」「利便性の向上」を目標とする研究開発を地道に続けることで、鉄道の価値を高め、再び多くのお客様に安心して快適に利用していただけるよう、研究開発をはじめとする各事業を推進する。

次の三つのことを念頭において鉄道総研の運営を進めたい。一つ目は、チャレンジ精神を持ち続けるということである。デジタル技術の進展は目覚ましいものがある一方で、この度の新型コロナウイルス感染症の影響で、鉄道の利用形態の変化、鉄道の様々なサプライチェーンの変化など、鉄道を取り巻く環境は大きく変化していることから、新たな研究開発分野にもチャレンジする必要があるかもしれない。これまでの考え方、やり方を踏襲しただけではうまくいかない場面も出てくるかもしれない。「変える必要があるものは変えていく」という姿勢で、新たな研究開発分野、チャレンジングな課題に積極的に取り組んでいきたい。二つ目は、個々の研究者の研究能力を高め、本質を見抜く力、科学的・工学的なアプローチに基づく問題解決能力など研究者の基礎力を引き続き高めていくことである。そのために、研究者の地力をつけるのに重要な基礎研究に力を入れる。災害や鉄道設備の不具合に対する原因調査や対策提案などに的確に対応できる組織であり続ける必要があり、そのための人材育成、必要な試験設備の整備などを引き続き進めていく。三つ目は、基本計画RESEARCH 2025を着実に推進することである。状況によって、修正を加えながら進めていきたい。

私は、「何事もプラス思考で前向きに、仕事は楽しく」をモットーにしている。研究開発は、これまで誰も行ってない新たな価値を生み出すことであり、楽しいことのはずである。こんな時こそ、日々の仕事に楽しみを感じながら、一緒に元気よくがんばっていこう。



写真 理事長退任の挨拶を行う熊谷則道



写真 理事長新任の挨拶を行う渡辺郁夫